

## 遺構は語る懐深し松井田城 「登城路」

山 添 康 夫

松井田城址で特に注目される貴重な遺構としては、柘尾根東斜面の連続竪堀、柘尾根西斜面下の登城路、本丸と二の丸の間にある馬出し、旧天神山隧道の真上の尾根にある連続空堀があげられる。その中で、柘尾根西斜面下の登城路だけが城址見学ルートから外され、私達もその存在すら把握していなかった。

大手道登城口、バイパス登城口とも登頂後、主に尾根の稜線を一元的に辿るのに対し、登城路は柘尾根の急峻な西斜面を沢まで降りなければならぬこと、又、梅ヶ谷津の沢沿いか碓谷戸尾根沿いの小道から入るにしても、幾重もの篠藪が行く手を遮り、更には、この梅ヶ谷津は以前、水田であったことから、現在は猪の絶好の「ぬた場」と化し、足跡も無数に見られることなどを勘案すると、登城路見学は危険と隣り合わせであり、見学ルートとしては完全に封印されてしまったものと思われる。

私は昨年立ち上げた松井田城址保存会の会員であり

会の最終目的である国史跡指定のためには何をなすべきか常々考えていた。

松井田城に続く安中郭跡は安中市指定史跡である。松井田城址が国指定史跡を目指すならば市指定、県指定と順を踏まなければならない。当局としての優先事項、進捗状況等を思料すると、指定への道程は厳しいものがあると想像できた。

そうした中で注目したのが先の登城路である。沢の中に、尾根に平行な大規模な人工の土手を築いたものであるが、その希少性ととも、築造の目的が今一歩明確でないことも興味を引いたからである。松井田城の他の遺構も大変貴重であるが、この登城路のような形式は他に無いのである。松井田城のここにしか存在しない唯一のものであると確信している。

それ故、登城路が日の目を見ることにより、松井田城への関心と評価は一気に高まり、次の段階の指定への道を押し開くものと考えたからである。

これらの提言が、平成三十年五月二十日に開催された松井田城址保存会総会の事業計画案において、見学コースの新ルート開拓として承認されるに至った。

これをうけ、平成三十年六月九日午後二時に、私は保

存会会員の仲間である石井俊介氏と梅ヶ谷津から登城路を目指し山に入った。碓谷戸尾根沿いの小道は百三十メートルも行くとすつかり篠藪に覆われ、我々二人だけの草刈り機では全く歯が立たない状況であった。一旦、荒れた休耕田を進んだものの、膝近くまで伸びた雑草と足元の悪さは蝮等の存在を予感させ、気持の良いものではなかった。休耕田をしばらく進み、再び小道に戻ったものの、程なく灌木等に遮られた。

休耕田もこの辺りからは段状の荒地地となり、草刈り機でびっしり生えた篠藪等を、人が歩ける幅だけ刈り込むのが精一杯であった。土手の高さも相当あることから休み休み進むも作業は難航した。やがてアオキの植生が見え、作業は楽になるものと、ほっとしたのも束の間、植生の間は僅かであった。

その先百メートル位は、見通しは良いが樹木の倒木が多く、跨ぐにも難儀をする場所が多いことから、草刈り機のスイッチを切った。

まもなく、前方左手、終尾根沿いに樹木に囲まれているものの、何か四角いような形状の塊が目に入ってきた。何であるかはつきりしないが、明らかに自然の造形とは異質なものに見えた。はやる心を落ち着けて谷沿いを進

むと、間違いなく人の手になる土塁であることが確認できた。

この土塁の前には小さな沢が有り、碓谷戸尾根側の土塁に沿った流れが引き込まれているが、水量は少量であり、終尾根側の沢に流れ込んでいた。土塁までは一旦、沢に降りてからまた上るのである。方形の二段の形状の土塁は奥行、幅とも三十メートル、沢からの高さも六メートル近くあり、見通しも良いことから、敵からの防御には最適の場所になっている。

土塁を経て土居に繋がる辺りは窪地になっていることから、当時は碓谷戸尾根側の沢の流れを、ここに引き込んでいたものと思われる。その証拠には、終尾根側には幅二メートル、深さ一メートルの流れ込み口の痕跡がはつきり残っていた。

土居の断面中間辺りに、門の礎石かどうか判明しないものの大きな石が顔を覗かせ、その脇には猪の足が三十センチメートルほど滑った爪跡が見られた。

上りきった先には蒲鉾形の登城路を思わせる土居がまっすぐに続いている。山の等高線をほぼ直角にゆったり上っているように見える。薄い灌木に覆われているが土居の存在は明確である。歩いた感触では幅十メートル、

終尾根側の沢からの高さは五メートル位に思えた。土居の表面の凹凸はほとんど無く、あたかも高低差の無い古墳の墳丘上を歩いているようで心持ちは軽快であった。

ふと、終尾根側の沢を一瞥すると不思議なことに沢には水気が無い。沢を覗き込むと一直線であり断面形状も同じであり、人工的であることから自然の沢とは趣が異なっていた。思うにこの沢は何らかの目的のために掘り上げられ、その土砂は土居用として積み上げられたと思う。それでも土居の用土としては不足するため、足らずの土砂は斜面の豎堀掘削の残土で賄ったのではないだろうか。何れにしても想像を超える大土木工事であったと思う。

土居を五十メートル位進んだところで、達成感の裏返しと思われる疲れが一気に出たことから、その先は次回とすることにした。

次に山に入ったのは、平成三十年七月八日に行われた松井田城址保存会の草刈作業の時であった。この時の重裝備、別動隊メンバー六人の作業効率はずさまじく、切り開き不可能と思われた篠藪四百メートルを一時間で処理してしまった。時間の制約もあることから、その先の篠藪は次回に残して、一路、土塁を目指した。

土塁の草刈作業を進める中、碓谷戸尾根側からの流れと終尾根沿いの人工の沢とが合流する地点から四メートル上流に、直径一メートルほどの大きな石が三個ほど人工の沢に積まれていた。明らかに、土塁と土居の間から引き込んだ碓谷戸尾根側からの沢の水をここに溜め、籠城に備えたものと考えられる。この場所は、外部からは土塁に遮られ目視が不可能な場所であった。

当初は蒲鉾形のゆったりとした形状に思われた登城路も奥に上るのに伴い、幅も狭くなり、断面は三角形に近い形状になっていた。そのあたりの碓谷戸尾根側の沢は深く十メートルを超える谷にもなっている。一方の終尾根側の沢も八メートル程の深さになっているが、依然として水の流れの気配は全く無い。

この土居の長さは、最奥の終尾根の連結部まで百メートル位と思われた。超巨大な登り窯のイメージであった。三回目の踏査は、平成三十年七月十七日に行った。この土居が急峻な終尾根西側とどのように連結し、登城路としての機能を真に有していたのかを調査するためである。石井俊介氏、小林芳男氏と私の三名は終尾根の連続豎堀の中間付近の反対斜面を登城路を目指して下ることにした。急峻な北側斜面を予想し、長い登山用ロープも

用意しての沢下りであった。緩やかな斜面が続き、灌木の枝を掃えば何とか進める状況であった。しかしながら、左手の沢は深く垂直の谷になっており、近づくとも足が震えた。長期間、人の侵入を見なかったこの斜面には、直径二十センチメートル位の蔦が高い幹の上部まで絡みつき、蔦なのか幹なのか分かりかねない異様な光景を見せていた。

予想に反し、なだらかな斜面はそのまま続き、ついに登城路最奥部が姿を現し、やがて繋がった。頂上部からの距離は七十メートル位であろうか。

これにより、登城路から柘尾根への通路は急峻なものではなく、やや勾配はあるものの爪先上りで上れることが判明した。

柘尾根の西側斜面は全て急峻な崖である。しかし、この登城路を利用することにより、柘尾根の頂上部まで残り七十メートルの緩やかな坂を残すだけで、平地と同じような条件で物資の搬入を可能にしたものであり、画期的であると言わざるを得ない。反面、敵に占領された場合の危険性は極めて高くなることから、柘尾根には様々な防御手段が施されていたのである。

登城路と柘尾根の連結部付近は、やや広い平らな形状

を示していることから、何らかの中継地的役割を果たしていたものと考えられる。その先の下り勾配が始まる辺りから、人工の溝が掘られ始めており下部の沢へと続いていた。この沢は水源を有していないことから、現在も水気の無い空堀を形成していたのである。

土居の最上部辺りは、溝の掘り上げ土砂量分だけで築かれており、思いのほか小規模な盛土の様相に驚かざるを得なかった。

灌木が無ければ、強固な土塁を共に一直線に築かれた土居は、梅ヶ谷津の入り口からは大変良好な景観として、目に映ったはずである。しかしながら、時は戦国時代、景観を目的に作ったとは到底考えられない。松井田城の心臓部に繋がる柘尾根の何段にも連なる堀切と豎堀を、より壮大なものに見せるためには構築物や土居との視覚的対比により強調し、敵の攻撃意欲を削ぐ意図があったのであろうか。

思うに平時には、豎堀上部と土塁、土居にスキー場のリフトの滑車宜しく構造物を築き綱で水、物資等を引揚げたのではないだろうか。想像以上の重量物が豎堀上部に引き揚げ可能であったと思われる。

土居の内側に掘られた空堀も、戦時には敵からの攻撃

に対する塹壕、物資補給の連絡路等、様々な機能を發揮した筈である。

籠城時、数千人の水補給は、前述の外部の目には触れない土塁の内側に設けられた堰から汲み上げたと思われる。結果的には、碓谷戸尾根側の土居に沿った流れの引き込み口を敵に切られたことで落城に至ったのである。

高梨子側から、上級武士は大手道を籠で、中級武士は柘尾根東側口から馬で、下級武士は登城路を歩いて登城したのではないかと想像するのも楽しいことである。

登城路についての勝手な解釈をしてみました。是非とも、山城好きに来ていただいて、何のために築かれたのか考えを巡らしたり、荒唐無稽な想像でも構わないので色々な意見を寄せてもらいたいと思う。

戦国時代の事象で絶対ということはありません。それぞれの可能性を論ずる中からベストの識見を導き出し、歴史としての見方が組み立てられるからである。

これらの積み重ねにより、松井田城の懐の深さ、希少性が全国的にも幅広く伝わり、指定史跡に向けて前進すれば幸いと考える。

現地を気軽に見学するためには、柘尾根の連続塹堀付近の頂上部から西斜面を登城路に向け草木を下刈りし、

ルート道を構築することも必要であろう。

しかしながら、登城路見学は梅ヶ谷津から沢を入り、当時の攻防に思いを馳せながら、景観を味わうことが何よりの醍醐味であると思われる。

そのためには、駐車場確保等を含めた地権者の協力、コース道の整備、動物等からの安全対策など課題も山積みであるが、一歩一歩解決し、この貴重な遺構を世に出し歴史的価値を更に高めることに尽力したい。

願わくは、この「登城路を含めた松井田城を知らずして山城を語るなかれ」と云われることを夢見る一人である。



齋藤慎一作成図より 松井田城探索図